

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年12月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万6835トン、前年同月比88.5%、価格は1キログラム当たり353円、同137.6%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万6037トン、前年同月比91.1%、価格は1キログラム当たり313円、同133.8%となった。
- 干ばつが続くと、このまま3月まで入荷量が少なく平年を上回る高値で推移することが予想されるため、今後の雨の降り方が注視される。

(1) 気象概況

上旬は、期間のはじめは全国的に高気圧に覆われたが、3日に低気圧が日本の北を通過した後は、東日本を中心に西高東低の冬型の気圧配置が続いた。旬平均気温は、全国的に期間の前半は寒気の影響を受けにくかったが、期間の後半は寒気の影響を受けやすく、全国では平年並だった。旬降水量は、東・西日本太平洋側と西日本日本海側でかなり少なく、北日本太平洋側で少なかった。一方、東日本日本海側で多く、大雨となった所もあった。旬間日照時間は、北・東・西日本太平洋側でかなり多く、西日本日本海側と沖縄・奄美で多かった一方、東日本日本海側で少なかった。

中旬は、アリューシャン低気圧が強く、シベリア高気圧が東シナ海に張り出して冬型の気圧配置が続きやすく、太平洋側では低気圧の影響を受けにくかった。旬平均気温は、北日本を中心に全国的に寒気の影響を受け全国で低かった。旬降水量は北日本太平洋側でかなり少なく、東・西日本太平洋側と沖縄・奄美で

少なかった一方、北・東日本日本海側で多かった。旬降雪量は、北日本日本海側で多かった。旬間日照時間は北日本日本海側でかなり少なく、沖縄・奄美で少なかった一方、北日本太平洋側でかなり多く、東・西日本太平洋側で多かった。

下旬は、旬平均気温は、寒気の影響を受けやすかった北日本で低かった。旬降水量は、日本付近で冬型の気圧配置が続き東日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側で多かった。一方、低気圧の影響を受けにくかった北・東・西日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美で少なかった。旬降雪量は北日本日本海側で多く、特に北日本日本海側と北日本太平洋側の山沿いでは、23日頃には冬型の気圧配置が強まり記録的な降雪となった所があったほか、降雪が続き記録的な積雪となった所があった。旬間日照時間は東日本日本海側でかなり少なく、沖縄・奄美で少なかった。北日本太平洋側で多かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側	日本海側	日本海側	日本海側	日本海側	日本海側
東日本				日本海側	日本海側	日本海側	日本海側	日本海側	日本海側
西日本					日本海側			日本海側	太平洋側

資料:気象庁「12月の天候」

1 平年を上回る水準 2 平年並み 3 平年を下回る水準

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は10万6835トン、前年同月比88.5%、価格は1キログラム当たり353円、同137.6%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（12月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	106,835	88.5	85.2	353	137.6	148.8	321	332	407
だいこん	9,791	89.9	88.7	120	171.9	182.9	106	110	141
にんじん	6,886	83.5	81.1	181	131.1	147.4	174	177	191
はくさい	15,842	105.2	101.6	81	183.2	199.5	66	76	102
キャベツ類	10,074	74.2	73.9	239	300.8	354.1	189	231	299
ほうれんそう	1,421	81.8	91.5	649	152.5	138.7	597	603	750
ねぎ	5,145	93.4	90.0	468	125.6	150.4	442	439	516
レタス類	5,536	87.8	80.4	438	184.8	222.0	404	397	504
きゅうり	3,590	88.0	85.9	556	125.7	130.0	558	542	568
なす	981	73.3	69.8	688	162.2	150.7	615	720	740
トマト	3,086	66.0	65.4	651	156.9	163.1	749	565	652
ピーマン	1,460	83.5	83.7	774	192.2	187.2	801	770	746
さといも	1,285	88.6	82.1	396	106.8	116.5	352	378	437
ばれいしょ	7,026	93.2	88.2	177	149.0	132.7	159	179	192
たまねぎ	8,077	113.0	89.6	144	75.2	118.0	144	145	143

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、絶対量不足から堅調な価格が続き下旬に上げ、やや高値で推移した前年を7割以上上回り、平年も8割以上上回った（図2）。

葉茎菜類は、キャベツの価格が加工仕向けを含めた絶対量の不足から大幅な高値で推移し、下旬に向け高騰した。価格は高値で推移した前年のほぼ3倍となり、平年の3.5倍以上となった（図3）。

果菜類は、ピーマンの高値は上旬から下旬に向け徐々に落ち着く傾向となったが絶対量不足により堅調な価格で推移し、前年、平年ともに9割近く上回った（図4）。

土物類は、ばれいしょの価格が下旬に向け上げ、やや安値で推移した前年を5割近く上回り、平年を3割以上上回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

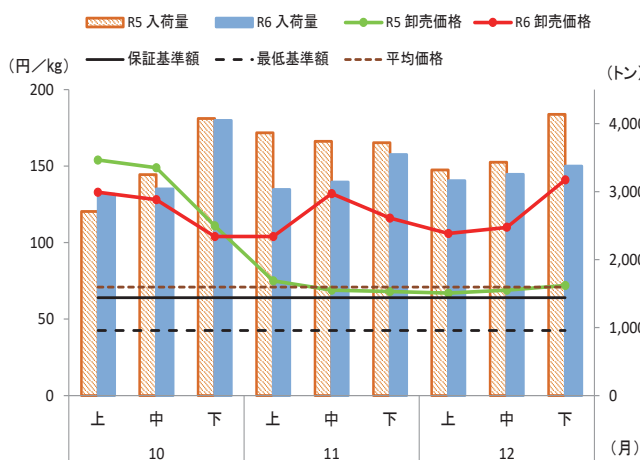


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

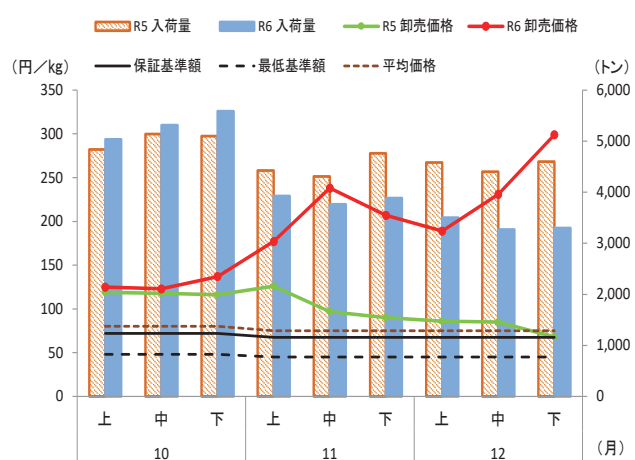


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

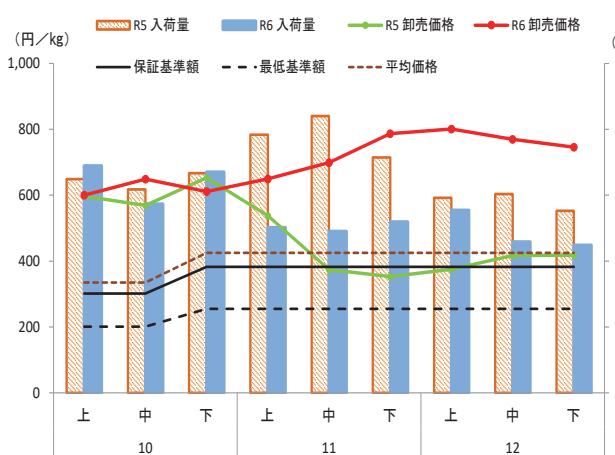
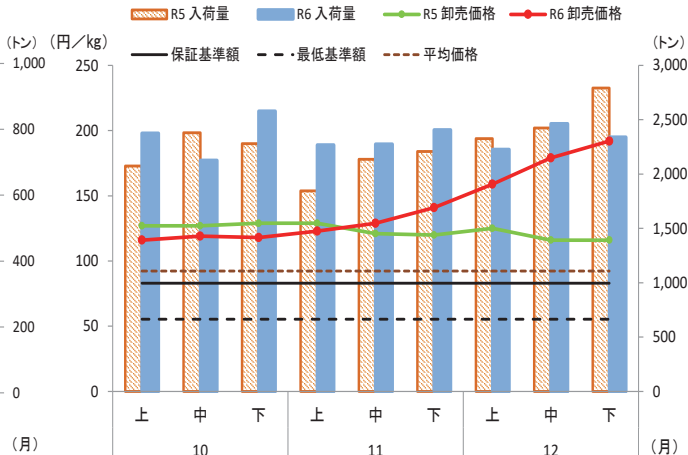


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	12月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	千葉産を中心に神奈川産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、播種期の高温・乾燥と10～11月の降雨の影響により、県下全域に生育遅延やばらつきが見られる。神奈川産の作付面積は前年をやや下回る。播種期からの高温・乾燥の影響により初期生育は遅延していたが、その後10月の高温で回復した。11月に入ってから低温で再度遅延やばらつき、病虫害も散見された。総入荷量は前年、平年ともに1割以上下回った。 絶対量不足から堅調な価格が続き、やや高値で推移した前年を7割以上上回り、平年も8割以上上回った。
	にんじん	千葉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで初期の生育は高温・乾燥の影響によりやや遅れた。回復傾向であったが11月の低温により、生育は再度停滞した。輸入の中国産は前年を2割以上上回った。総入荷量は少なかった前年を2割近く下回り、平年も2割弱下回った。 堅調な価格が続き、高値で推移した前年を3割強上回り、平年を5割近く上回った。
葉茎菜類	はくさい	茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、定植期の高温により遅れが散見されたものの、その後の天候で回復傾向となり、生育はおおむね順調であった。総入荷量はやや少なかった前年を上回り、平年をわずかに上回った。 価格は気温の低下で堅調な動きとなり、他の品目の不足感から下旬に向け上げた。やや高値で推移した前年を8割以上上回り、平年の2倍近い価格となった。
	キャベツ類	愛知産を中心に千葉産などが入荷した。愛知産の作付面積は前年並みで、10月以降の曇天の影響で根の張りが悪く生育が遅延し、虫害が多く病害も散見される。千葉産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥および局地的な集中豪雨により初期生育の遅れが散見され、また虫害も多発している。茨城産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調である。全体的な不足感から、高値で小玉での出荷が続いた経緯もあり箱数は少ない。総入荷量は前年、平年ともに2割以上下回った。 価格は、加工仕向けを含めた絶対量の不足から大幅な高値で推移し、下旬に向け高騰した。高値で推移した前年のほぼ3倍の価格となり、平年の3.5倍以上となった。
	ほうれんそう	群馬産、茨城産中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、夏秋産地はほぼ終了した。後続産地の露地作は高温による前進傾向から急激な気温低下と干ばつの影響により数量が伸びず虫害もやや多い。茨城産の作付面積は前年並みで、急激な気温低下と干ばつの影響により露地作の生育が遅延した。総入荷量が多かった前年を3割以上下回り、平年を2割以上下回った。 価格は、干ばつの影響が大きく特に露地作の数量が伸びず、月間を通して計画通りに増加しなかったことから堅調な動きが続き、安値で推移した前年を5割以上上回り、平年を4割近く上回った。

	ねぎ 	茨城産を中心に千葉産、埼玉産など関東秋冬作中心の入荷であった。茨城産の作付面積は前年を上回ったものの、夏場の高温と降雨の影響により生育遅延し、肥大もあまり進まず虫害も多い。千葉産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥による生育停滞からは回復傾向も、その後の気温低下により肥大が悪く虫害もやや多い。埼玉産の作付面積は前年並みで、気温の低下に伴い遅延していた生育は回復傾向も、肥大は悪く虫害も散見された。総入荷量は少なかつた前年をかなりの程度下回り、平年を1割下回った。 価格は、関東秋冬作が低温・干ばつにより予想より増量せず堅調な動きとなり、大幅に高値で推移した前年を2割以上上回り、平年を5割ほど上回った。
	レタス類 	静岡産を中心に長崎産、香川産などの入荷があった。静岡産の作付面積は前年並みで、早期定植分に虫害や生育不良が散見されたが回復傾向である。長崎産の作付面積は前年並みで、適度な降雨と気温に恵まれおおむね順調も増加ペースは遅く、一部高温や強風による変形が見られる。香川産の作付面積は前年並みで、11月の気温が高かったため肥大は順調であったが、生理障害や虫害が散見されたほか、一部降雹被害があった。総入荷量は少なかつた前年を1割以上下回り、平年を2割ほど下回った。 価格は、西南暖地の増量ペースが遅かったことにより、高かつた前年を8割以上上回り、平年の2.2倍以上となった。
果菜類	きゅうり 	宮崎産を中心に千葉産、高知産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、高温と天候不順の影響で軟弱、徒長傾向であるが生育はおおむね順調。千葉産の作付面積は前年並みで、生育自体はおおむね順調も11月の曇雨天の影響で鈍化傾向であり、病害の発生が散見される。高知産の作付面積は前年並みで、11月中旬以降に昼夜の寒暖差が出てきたことから徒長傾向からは回復した。好天が続いたことから出荷量も安定してきたが、やや病害が散見される。総入荷量は少なかつた前年、平年ともに1割以上下回った。 価格はほぼ上下なく堅調に推移し、前年を2割以上上回り、平年を3割上回った。
	なす 	高知産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、11月中旬以降の天候により樹勢は回復基調にあるものの、やや弱い。一部ヨトウムシ、コナジラミ類の発生が散見されるが、気温の低下に伴い減少傾向にある。総入荷量はやや多かつた前年を3割近く下回り、平年を3割近く下回った。 価格は中旬以降に上げ、やや安値で推移した前年を6割以上上回り、平年を5割強上回った。
	トマト 	熊本産を中心に栃木産、愛知産などの入荷であった。熊本産の作付面積は前年を下回り、ミニトマトへの移行が進んでいる。高温時の定植での樹勢の低下から、10月の曇雨天、低温の影響により、着色不良が顕著で小玉傾向であった。病虫害の発生は少ない。栃木産の作付面積は前年並みで、促成作は樹勢がやや弱いものの大玉傾向で、病虫害は少ない。冬春作は順調である。愛知産の作付面積は前年並みで、高温の影響による裂果は落ち着いたものの、着果不良が散見され小玉傾向である。総入荷量は前年、平年ともに3割以上下回った。 価格は高値で、上旬から中旬以降やや落ち着いたものの、前年を5割以上上回り、平年を6割以上上回った。
	ピーマン 	宮崎産を中心に茨城産、高知産、鹿児島産などの入荷であった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も一部高温の影響により樹勢低下が散見され、病虫害も見られる。茨城産の作付面積は前年並みで、生育遅延からは回復傾向も高温障害の影響により樹勢が低下しており、全体的に小玉傾向となっている。高知産の作付面積は前年並みで、天候の回復により生育は回復傾向であるも、病虫害が散見され、平年より少ない。鹿児島産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調である。総入荷量は、前年、平年ともに2割近く下回った。 高値は上旬から下旬に向け徐々に落ち着く傾向となったが、絶対量不足により堅調な価格で推移し、前年、平年ともに9割近く上回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、生育は良好で収穫も順調に進んでいたが、潤沢と予測された年末に向け想定ほど増量しなかつた。輸入の中国産は前年を4割以上下回った。総入荷量は少なかつた前年を1割以上下回り、前年を2割近く下回った。 価格は年末に向け特に下等級の不足感が顕著となったことから、高値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上上回った。
	ばれいしょ 	北海道産を中心に長崎産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫が終了した。やや干ばつ傾向から気温の上昇と適度な降雨があり、順調に肥大した。長崎産の作付面積は前年並みで、高温と降雨の影響で品質不良も多く、10日前後の生育遅延があり、病虫害も多かつた。総入荷量は少なかつた前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。 価格は下旬に上げ、やや安値で推移した前年を5割近く上回り、平年を3割以上上回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで収穫が終了した。中晩生以降の品種はやや小玉傾向だが順調な出荷であった。輸入の中国産は前年のほぼ半分となっている。総入荷量は少なかつた前年を1割以上上回ったものの、平年を1割弱下回った。 価格は、不足感から暴騰した前年を2割以上下回り、平年を2割近く上回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万6037トン、前年同月比91.1%、

価格は1キログラム当たり313円、同133.8%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(12月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	36,037	91.1	88.7	313	133.8	149.9	287	300	354
だいこん	3,182	95.0	81.3	150	158.3	197.9	139	136	172
にんじん	2,327	87.1	84.6	220	151.7	175.9	209	230	220
はくさい	7,268	109.8	111.3	106	182.6	197.1	90	98	128
キャベツ類	3,542	71.2	74.5	253	324.9	389.2	201	226	325
ほうれんそう	392	66.3	74.6	740	156.7	153.9	741	688	795
ねぎ	1,182	92.5	91.0	640	130.7	147.8	580	588	731
レタス類	850	72.0	64.2	429	210.1	239.0	381	395	492
きゅうり	864	85.7	85.5	510	124.4	125.9	519	498	514
なす	380	90.6	97.6	552	138.7	136.4	529	569	555
トマト	856	59.5	63.1	606	151.0	158.1	726	544	571
ピーマン	394	81.2	95.3	762	191.0	186.6	773	775	740
さといも	264	94.8	79.4	477	120.1	141.9	422	499	497
ばれいしょ	2,915	107.7	102.6	174	175.5	140.9	163	179	184
たまねぎ	4,547	109.9	89.4	141	78.8	121.4	145	137	142

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	12月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	和歌山産が中心となり、鹿児島産、徳島産、千葉産、長崎産などの入荷があった。九州各産地は作柄不良から産地出荷量が少なく、入荷量も少ない状況が続いた。鹿児島産は前年の半分程度、長崎産も前年を大幅に下回った。月間全体では少なかった前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。 入荷量が少ない中でも太物が多く、品薄感と野菜全体の高値の影響により高値が続き、下旬には年末年始需要でさらに高騰した。月間では前年の1.5倍以上、平年の2倍近くとなった。
	にんじん 	長崎産が中心となり、後続の鹿児島産の入荷も中旬からスタートした。小玉傾向で産地出荷量が伸びず、入荷量が少ない状況が続いた。月間では長崎産は前年をかなり下回り、鹿児島産は前年の半分以下であった。年末商材の香川産の金時人参の入荷もあったが、にんじん同様に小玉傾向で品質低下品も多く、入荷量が少ない状況が続いた。月間全体でも前年、平年ともにかなり大きく下回った。 価格は品薄感と野菜全体の高値の影響により、高騰が続いた。月間では前年の1.5倍以上、平年の1.8倍近くとなった。
葉茎菜類	はくさい 	茨城産を中心とし、和歌山産や兵庫産などの入荷もあった。各産地とも秋の気温高と干ばつの影響が残り、生育不良により産地出荷量が少なく、入荷量も少ない状況が続いた。中旬以降は年末に向けて需要が高まる中入荷量は伸び悩んだが、月間全体では前年、平年ともにかなり上回った。 価格は需要期の絶対量不足で高値が続き、年末に向けて下旬にはさらに高騰した。月間では前年の1.8倍以上、平年の2倍近くとなった。
	キャベツ類 	愛知産と茨城産が主体となり、大阪産などの入荷もあった。各産地とも定植後の気温高と干ばつの影響により生育が悪く、12月に入ってから急な気温低下で肥大が悪く、また品薄から引き合いが強まり、小玉での早どり出荷気味となったことから産地出荷量が少ない状況が続いた。月間全体の入荷量は前年、平年ともに3割近く下回った。 価格は品薄感と野菜全体の高値の影響がある中で、加工・業務用筋の絶対量不足から高騰が続き、年末に向けて旬を追うごとに上昇を続けた。月間では前年の3倍以上、平年の4倍近くとなった。
	ほうれんそう 	徳島産を中心に主力の福岡産の入荷などもあった。急に気温が下がり、また干ばつの影響もあり生育が悪い状況が続いた。月間では徳島産は不作だった前年の入荷量は上回ったが、福岡産は前年の半分以下にとどまった。全体的な入荷量は前年、平年ともに大幅に下回った。 価格は品薄感と野菜全体の高値の影響を受け、量販店からの引き合いも強く高値で推移した。月間では前年、平年ともに1.5倍以上となった。

	<p>ねぎ（白ねぎ）</p> <p>群馬産が中心となり、中旬以降は、長野産の残量や後続の埼玉産の入荷があった。需要期を迎え、年末に向けて引き合いが強まる中でも産地出荷量は伸び悩んだが、月間全体の入荷量は前年を大幅に上回った。</p> <p>価格は他の野菜の高値の影響により高値が続く中で、年末需要を迎えて下旬にさらに高騰した。</p>
	<p>ねぎ（青ねぎ）</p> <p>徳島産が中心となり高知産や香川産、近隣の大阪産や奈良産などの入荷があった。各地とも干ばつ傾向から生育が悪く、産地出荷量が少ない状況が続いた。主力の徳島産と高知産の月間入荷量は前年を大幅に下回り、月間全体でも前年を下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足と野菜全体の高値の影響に加えて、年末に向けた需要増により旬を追うごとに上押し、下旬には高騰した。</p>
	<p>レタス類</p> <p>ラップ物は兵庫産が中心となる入荷であった。裸物は鹿児島産と長崎産が主体となった。急な気温低下と干ばつから生育不良となり、産地出荷量が少ない状況が続いた。月間全体では前年を大幅に下回る入荷量となった。サニーレタスは福岡産が中心となる入荷で、産地出荷量は少ない状況であったが、レタスの単価高から引き合いが強まり、量販店での特卖需要も多く入荷増量となり、月間全体の入荷量は前年をやや上回った。リーフレタスは福岡産が中心となる入荷であったが急な気温低下と干ばつの影響で産地出荷量が少ない状況が続いた。レタス類全体の月間入荷量は前年、平年ともに大幅に下回った。</p> <p>絶対量不足により業務用関係からの引き合いが強まり、価格は高騰した。サニーレタス、リーフレタスもレタスの不足感から引き合いが強まり、野菜全体の高値の影響もあり高騰が続いた。月間全体では前年、平年ともに2倍以上となった。</p>
	<p>果菜類 きゅうり</p> <p>宮崎産を中心に高知産や徳島産などの入荷があった。秋の気温高で初期の生育不良があり、各産地とも産地出荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、前年、平年ともかなり大きく下回った。</p> <p>野菜全体の高値の影響もあり全旬とも高値が続いたが、量販店での特卖なども少なく、需要は伸びずに販売に苦戦した。価格は、月間では前年、平年ともに大幅に上回った。</p>
	<p>なす</p> <p>千両系は高知産が中心となり、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。各産地とも急な気温の変化で樹勢が弱く、着果量が少ない状況で産地出荷量は伸び悩んだ。入荷量は、月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>野菜全体の高値の影響により、全旬を通じて高値が続いたことで量販店などからの発注量が少なく販売に苦戦し、年末の価格は伸びなかった。月間では前年、平年ともに1.3倍以上の価格となった。</p>
	<p>トマト</p> <p>主力の愛知産と熊本産が中心となる入荷であった。定植後の気温高の影響により着果不良となり、産地出荷量が少ない状況が続いた。全旬とも入荷量が伸びず、クリスマスと年末の需要期である下旬の入荷量が少なく、月間全体では前年、平年ともに4割程度下回った。</p> <p>価格は、端境で高騰した前月の高値の影響が残る中で入荷がスタートし、中旬にやや落ち着いたかと思われたが、絶対量不足と野菜全体の高値の影響に加え、需要期の引き合いが強かった下旬に向けて再び上押し、月間では、前年、平年ともに1.5倍を上回った。</p>
	<p>ピーマン</p> <p>主力の宮崎産と高知産の入荷があったが、生育初期の気温高で着果不良が多く産地出荷量が少ない状況が続いた。入荷量は、月間全体では前年を2割程度下回り、平年もやや下回った。</p> <p>前月の高値の影響が残る中で一定の需要があり、野菜全体の高値の影響もあり全旬を通じて高騰が続いた。月間では前年の2倍近い価格となり、平年の1.8倍以上であった。</p>
	<p>土物類 さといも</p> <p>愛媛産が中心となり、山形産などの入荷もあった。年末商材の海老芋は、静岡産が中心となり近隣の大阪産の入荷もあった。愛媛産のさといもは作柄が悪く産地出荷量が少ない状況が続く、山形産で補ったものの不足感は続いた。赤目芋も作柄が悪く入荷量が少ない状況であった。海老芋は年末年始の需要で引き合いが強くなり入荷増量となった。さといも全体では前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は不足感から高値で推移し、月間全体では前年の1.2倍以上、平年の1.4倍以上であった。</p>
	<p>ばれいしょ</p> <p>丸芋は北海道産が中心となる入荷であったが、出荷も終盤となり安定した入荷が続く中でも減少傾向となった。後続の長崎産の新物は生育遅れに加えて不作で産地出荷量が少ない状況が続いた。月間入荷量は前年の3分の1程度となり、月間全体では前年を大幅に下回った。メイクインは北海道産の安定した出荷が続き、量販店からの注文も多く入荷増量となった。ばれいしょ全体では前年をかなり上回り、平年をやや上回った。</p> <p>丸芋の価格は、不足感と野菜全体の高値の影響により高値で推移した。メイクインは野菜全体の高値と丸芋の高値の影響があり、引き合いも強かったことで全旬を通じて高値で推移した。ばれいしょ全体では前年の1.7倍以上となり、平年の1.4倍以上となった。</p>
	<p>たまねぎ</p> <p>北海道産を中心に兵庫産の入荷があった。北海道産は不作だった前年と比べると安定した出荷が続き、月間入荷量は前年を大きく上回った。兵庫産は前進出荷により産地残量が少なく、全旬とも入荷量は伸び悩んだ。月間全体では少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、北海道産の不作で極端な高値だった前年を2割以上下回り、単価自体は安定的に高値で推移したことから平年を1.2倍以上上回った。</p>

（執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹）

(4) 首都圏の需要を中心とした2月の見通し

1月5～6日にかけ、ようやくまとまった降雨があり、主要産地は一息ついた。この時期の干ばつは、地温が上がらず生育が停滞しがちとなる。前年の8～9月の播種時期の天候不順により計画どおりに作業が進まず、さらに10月は残暑が厳しく、特に果菜類は定植の根の張りが悪かった。露地のブロッコリーやキャベツ、だいこんは多少生育が早まり増量が予想され、相場が高いうちに出荷したい意向から前進しているため、3～4月の春物への端境が長くなると見込まれる。カギを握るのは今後の雨の降り方であり、干ばつが続くと、3月まで入荷量が少なく2月は年内までと同様に平年を上回る価格で3月まで推移することが予想される。

根菜類

だいこんは、千葉産は12月までは順調に出荷されていたが、1月中旬から2月上旬にかけては出荷の減少が見込まれる。これは、10月上旬の天候不順により播種作業ができなかったことと、12月の低温と乾燥が影響している。トンネル栽培の春だいこんは2月上中旬から出荷開始するが、露地の秋冬物をできるだけ長く出荷したいため、年々後ずれさせている。全体的には、例年を若干下回る出荷予想である。静岡産は残暑が厳しく、播種を後ろにずらしたが、その後害虫の発生が多く干ばつで肥大が進まず、L中心のMが多く12月までは例年の半分程度となった。年明けには2L・3Lが増え、かなりの回復が見込まれるが、2月は平年並みと予想される。

にんじんは、千葉産は播種時期の天候不順と小ぶりの仕上がりのため、例年の80～90%と少なめの出荷となっている。1月上旬まで多いが、その後2～3月は徐々に減少しながら推移し、期間全体としても平年を下回ると予想される。中心サイズはLである。

葉茎菜類

キャベツは、千葉産は1月も年内までと同様、回復せず例年の半分程度の出荷と見込まれる。2月に入り、少し出荷増を期待しているが、それでも平年を大きく下回り、70～80%程度

となる見込みである。愛知産は12月は例年の60%程度となり、1月も回復せず、2月は干ばつが解消されれば増量が見込まれる。

はくさいは、茨城産はやや小ぶりに仕上がり、前年を若干下回った出荷となっている。干ばつ・低温が影響し4玉の13キログラム箱が中心であるものの、6玉の15キログラム箱が例年より多い。残量も平年より少なく、価格高により前倒しで出荷され、2月後半から減少するペースが早く、2月としては例年の半分近くとなる可能性もある。兵庫産は12月から出荷開始したが例年よりやや小ぶりな仕上がりとなり、平年よりやや少なく、1月をピークに2月は減少し、冷蔵物となる3月末までの出荷が見込まれる。

ほうれんそうは、埼玉産は例年より若干少なめの出荷が続いている。干ばつの影響もあるものの、前年の価格が安かったことにより作付けが減少したことがこの理由の一つである。

ねぎは、茨城産は降雨が一カ月以上もなかったことから肥大が悪く、箱数が伸びていない。11月は相場高から細くても出荷するなど前進した。2～3月は前年比では微減で推移し、4月は前年を下回ることが見込まれる。L～Mサイズが中心と予想される。千葉産は12月は干ばつの影響で平年の70%程度となった。1月6日の降雨により生育が早まり、1月の出荷は平年並みに何とか追いつくも、2月に端境を迎える可能性が予想される。中心サイズはL・Mで、全体的に細めである。埼玉産の秋冬ねぎは遅れており、1月中旬に出そろってピークになってくると見込まれる。品種変更により苗作りの段階で失敗したことが作を遅らせた一因であるが、2～3月には前年並みの出荷となることを期待している。

レタスは、兵庫産は虫害の影響で12月までは少なめとなった。年明けには順調に出荷されており、2月までは現状のペースが続くと予想される。3月は増えるものの、作付けは減少傾向にある。静岡産は12月の気温が低く雨も少なかったため、平年を下回る出荷となっている。引き続き1～2月も低温と乾燥の影響により、平年より少なめの出荷が予想される。2月まではピークが続く、3月に減少してくると予想される。Lサイズ中心の、やや小ぶりな物が多く

なると見込まれる。長崎産は定植時期の天候不順と低温と乾燥が続いたことにより小ぶりに仕上がっていることから、12月までは平年の70～80%と数量が伸びなかった。年明けは徐々に回復し、2月には平年並みの出荷となると予想される。茨城産はトンネル物となるが、前年は1月中旬から出荷開始したが、今年は1月下旬に後ずれする見込みである。定植は順調で、3月の彼岸前後からピークとなると予想される。香川産は11～12月まで乾燥が続き、さらに年末の寒さから生育が止まっていた。定植は問題なく行われているが、作付けの減少が続いており、さらに契約分に優先的に出荷されることから、市場出荷は例年の80%程度と予想される。玉肥大は問題ないが、変形果も多い見込みである。

果菜類

きゅうりは、高知産は11月から出荷を開始したが、猛暑の影響で数量は減少しており、年内の実績は少なかった前年の90%、平年比では80%と落ち込んだ。天候は12月に入り安定してきており、今後大きなピークはなく3月まで現状維持の出荷が見込まれる。千葉産は11月からの越冬きゅうりとなるが、夏の暑さや定植時期の病気が影響して不作傾向にある。今後も爆発的な出荷の伸びはなく、一定量での推移が予想され、2月は少なかった前年並みが予想される。群馬産は、年明けは12月初めに定植したものの出荷が開始し、2月初旬に定植する物がそろそろ3月初旬がピークになると予想される。生育は好天に恵まれ順調である。

なすは、高知産は12月までは平年を下回る出荷となった。定植時期の猛暑だけでなく10月の気温高と日照不足から生育不良になっている。2～3月は現状よりも増えるが、平年を上回ることはない見込みである。福岡産の長なすは12月までは数量が少なく、この減少を単価高でカバーできた。冷え込みもあり、出荷ペースは緩やかである。2月の出荷は花芽が付いていることから、平年を上回る出荷が予想される。ピークは4～5月で、当面大きな山が来ることはない見込まれる。

トマトは、愛知産は12月までは平年の70%ペースの出荷となり、1～2月についても回復

はほぼ期待できず、現状のペースで推移すると予想される。樹勢が弱い状況にある。熊本産は2月も着果が少なく、例年の60～70%の一定した出荷が続く見込みである。Mサイズ中心のSで、この時期としては小ぶりの物が多くなると予想される。

ミニトマトは、熊本産は1月初旬時点での出荷実績は前年比78%となっている。これは高温下での苗作りが悪かった影響で、本来は加温の開始で回復してくるが、苗自体の不出来から回復は見込めず、1月前半でやや増えるものの、2～3月も80%程度の出荷が続く見込みである。栃木産の越冬ものは例年よりやや少ないが、黄化葉巻病おうかはまきびょうの発生が影響している。1月下旬からの春ものが開始して数量が増え、2月は例年並みとなると予想される。中心サイズはMで、Lも多く見られる。品種は越冬ものは「かれん」中心に「りんか」で、春ものは「かれん」と「桃太郎ブライト」を中心に「TTM179」である。

ピーマンは、宮崎産は12月までは平年の60%で、9月に入ってから雨続きと10月の天候不順で根の張りが悪いことが影響した。現在は回復してきているが、2月は平年の80%程度に留まると予想している。中心サイズは平年並みのMとなっている。茨城産の春ピーマンは1月下旬からの開始が予想され、花芽もついて順調に生育している。ピークは5～6月であるが、2月は平年並みの出荷が予想される。作付けは前年並みである。

土物類

さといもは、埼玉産の24年産は平年並みの収穫量となっており、年明けには室むろに入れて貯蔵している。出荷は12月より減少しているが、3月に種いもの残りが出荷され、やや増える可能性がある。中心サイズはLと2Lが同程度の割合であり、品種は「土垂とだれ」と「蓮葉芋はすはいも」が7：3の割合である。

ばれいしょは、鹿児島産は徳之島の「ニシユタカ」が例年と同様の1月末から開始し、本格的な出荷は2月中旬頃からである。自然災害は特にないが、鳥の食害は発生しており、それでも前年より多く、3月初め頃までピークが続き4月10日には切り上がる見込みである。北海道全体の生産量は過去5年の平均の98%とや

や少ない。野菜全体の作柄が悪いことから引き合いが強い。ばれいしょの作柄は悪くなく、仕上がりも平年並みである。十勝産は小ぶりであるものの、全道ではL・Mサイズが中心である。北海道産（道南）の「今金男しゃく」は平年より若干多く豊作基調である。1月末をめどに出荷するが、市場の販売は2月上旬までと見込まれ、中心サイズはL大である。

たまねぎは、北海道全体としては小ぶりの仕上がりであり、L大が価格を引き上げているため価格高となっている。年明けは荷が薄くなり、例年より半月早く3月いっぱいまで終わる可能性が見込まれる。北海道産（道東）の進捗状況は平年並みで、2月も前年並みの出荷が予想される。収穫量は平年比でやや減である。中心サイズはL大である。静岡産は1月初旬時点でやや出遅れている。「ホワイト」の葉付きは1月で終わるが、白たまねぎは3月まで出荷される。黄たまねぎも開始しているが少なめとなっており、ほぼ4月までの出荷で、5月は少量と予想される。今のところ作としては平年並みと予想され、大玉に仕上がって生産量が伸びた前年より減となることが見込まれる。

その他



ブロッコリーは、愛知産は8～9月の天候不順により播種せず、また12～1月の低温もあり平年の半分に届かない不作となっている。1月には増加し始め、2月にはほぼ例年並みの出荷となり、ピークは3月まで続くと予想される。香川産は通常通り定植は順調に終了し、作付けは前年より若干増えている。出荷のピークは1～2月であるが、3月も量的には多く出荷できると予想される。干ばつで生育に時間がかかっているが、1月6日の降雨により、遅れが若干解消される見込みである。熊本産は干ばつと低温で計画通りの出荷ができておらず、1月6日の降雨はこれが解消されるほどの量ではなく、1月は少ないまま2月下旬から増量してくると予想される。

かぼちゃは、沖縄産は台風が接近した影響により定植が遅れたものの、生育は順調で収穫が開始したところである。東京市場での販売は1月20日からと例年より早い。ピークは3月中

旬と予想されるが、生育はやや遅れており、2月の出荷は例年より少なめと予想される。「栗五郎」と「えびす」がそれぞれ30%ずつで、残りの品種はさまざまである。輸入のメキシコ産は11月から入荷開始し、年末年始から本格的に増えてきている。主力産地はエノラ州エルモシーヨで、現地は高温傾向であったため仕上がりはそれほど良くない。生育期間が短かったということで、全般として小ぶりに仕上がっている。輸入は6月いっぱいまで続く見込みである。店頭価格は例年より高めを予想している。

ごぼうは、主力産地の青森産は、12月以降の掘り採り作業は緩やかとなっている。夏の暑さの影響により虫害の発生が多く見られ、高品質の物が少なく、曲がりや二股などの発生率も例年より多い。11月まで例年並みの価格推移であったが、12月には値が上がってきた。加工筋からの引き合いは2Lサイズ中心に高まっており、これは中国が日本への輸出に熱心でなくなっていることも理由の一つである。

かんしょは、茨城産は2月中旬から「べにまさり」が出荷開始する。「紅ゆうか(べにはるか)」も併売されるが2月いっぱいまで、「ベニアズマ」は6月に開始する。収穫の前半まで大ぶりの物が多く豊作と予想されたが、後半は小ぶりの物が多く、全体的には平年並みとなった。

たけのこは、熊本産は12月から出荷開始した。熊本産は九州では唯一の表年に当たり、昨年を上回る出荷が予想され、1～2月中旬まで2キログラム箱で、下旬から4キログラム箱になると見込まれ、掘り取る農家数に変化はないが、量は前年の150%と多めの出荷が予想される。福岡産はたけのこが出てからでないとは分らないが、裏年といわれている。前年は収穫が終わっても葉が落ちず、通常の年であれば4月10日前後にピークが来るが、葉が落ちなかった年は3月25・26日頃にピークが来る可能性がある。いずれにしても今後の気温と雨を中心とした天候次第となる。

セルリーは、静岡産は夏の猛暑の影響により、平年に比べ少なめの出荷となっているが、1月

初旬時点では回復してきている。2月は夏の暑さの影響を脱して、現在よりも良好となると予想され、ピークは1～2月となり、3月に減少すると見込まれる。

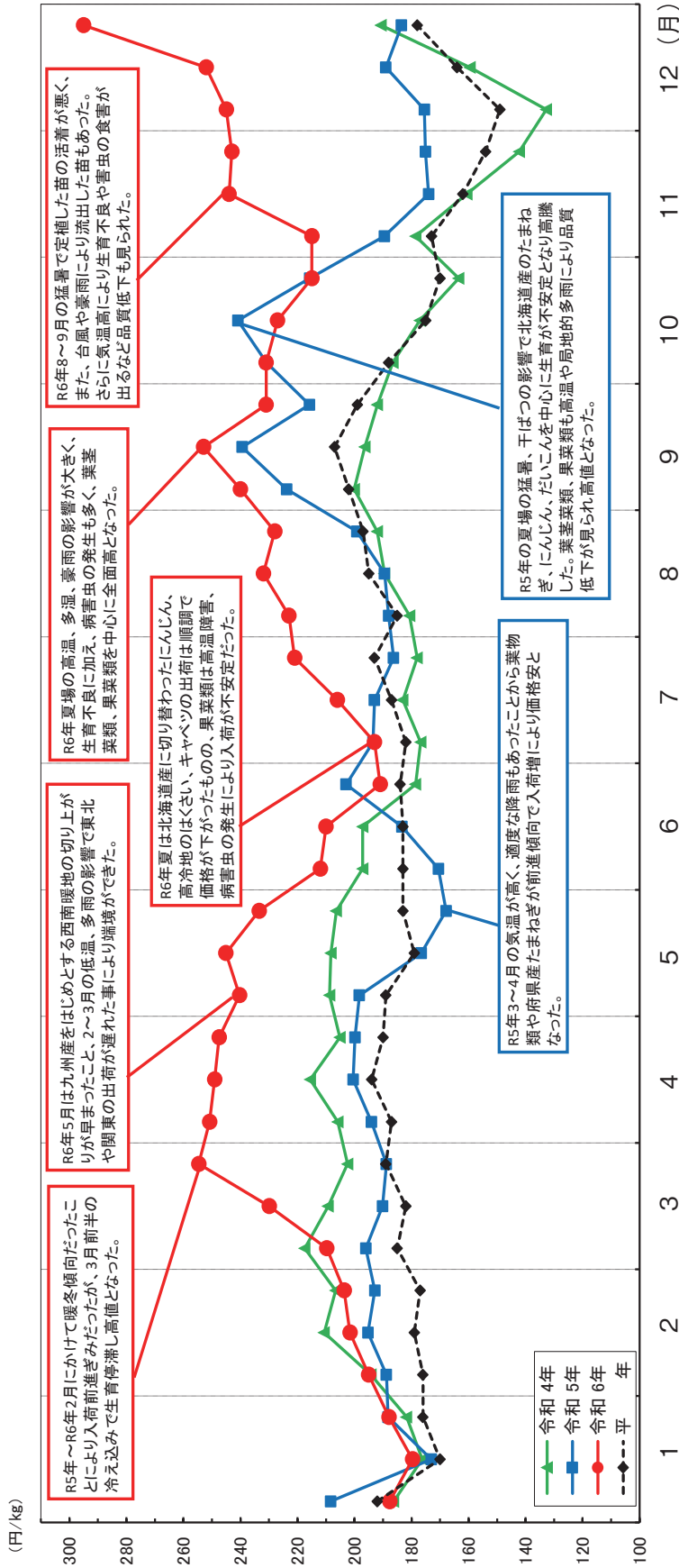
アスパラガスは、佐賀産は1月6日から選果を開始したが、作付けの減少により前年比でやや少なめの出荷が予想される。無加温のハウス栽培であるが、地面の保温開始が農家によってばらつきがあるものの、例年であれば3月上旬に増え、4月に立茎に入り減少してくることが見込まれる。

ハウスすいかは、熊本産は生産者の高齢化による自然減で、ピーク時の半分ぐらいの生産量になっている。1月末頃から始まり、2～3月は週に1～2回東京市場で販売する計画である。増えて来るのは4月に入ってからで、前年比では90%程度と予想される。

いちごは、栃木産は12月の出荷は少なめであったが、年明けの数量は伸びてきており、1月は通常通りかやや多く、2月には再び減少し、3月は増加に転じるといった出荷が予想される。

(執筆者：千葉県立農業大学校
講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

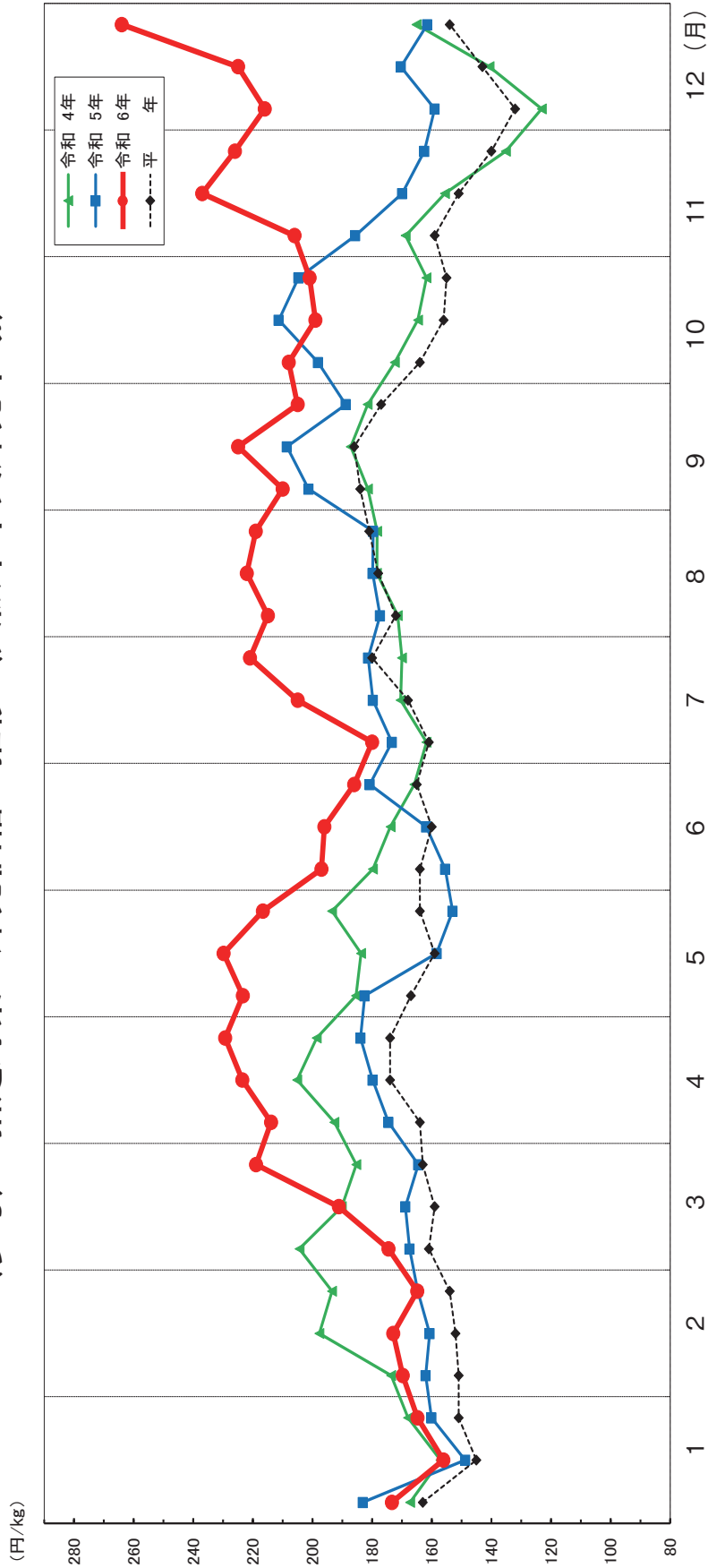
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬												
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191					
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	189	184	
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
平	192	170	176	176	179	177	185	182	189	187	194	190	189	179	183	183	184	182	187	193	185	195	197	202	207	199	188	175	170	173	162	154	149	164	178	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、定橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264
平 年	163	145	151	151	152	154	161	159	163	164	174	174	167	159	164	164	160	165	161	168	180	172	178	181	184	186	177	164	156	155	159	151	140	132	143	154

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。